西大寺寺地から出土した鴟尾

西大寺旧境内　奈良市西大寺南町

奈良市教育委員会では、昭和63年度以来、近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る発掘調査を継続して実施しています。平成16年度には、西大寺旧境内で実施した発掘調査で、屋根の大棟の両端を飾っていた奈良時代の鴟尾が出土しました。鴟尾の出土例は珍しく、貴重な発見となりました。

この調査は、現在の西大寺境内の東側で行いました。平城京の条坊では、右京一条三坊三坪に当たり、奈良時代後半に西大寺が建立された後は、主要伽藍の東にある寺地の一角となります。

調査の概要　調査では、1,000㎡の範囲を発掘しました。現地表下約0.8mで遺構のある面に達します。この面で、掘立柱建物4棟、掘立柱塀7条、井戸8基、土坑11基などを見つけました。建物の数に比べ、井戸の多さが目立ちます。

発掘区西半では、奈良時代の終わり頃に桁行6間（16.2m）、梁間3間（8.1m）の西庇付の南北棟となる大きな建物が建ち、その東3.9m離れた位置には、建物に平行して、南北13間（27.0m）以上の塀が造られています。

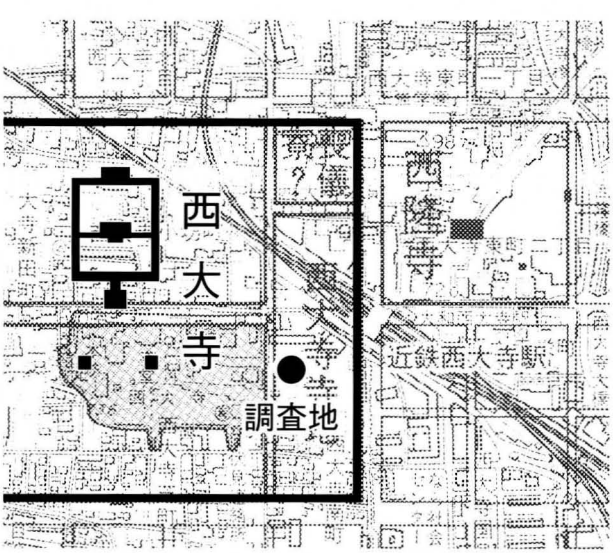
平安時代以降には、小規模な建物とそれを区画する塀が造られるようになります。そして、最も新しい塀は近世に入ってから造られたものであることがわかっています。

井戸には、奈良時代のものから室町時代に至るものまで様々な時代のものがあり、井戸枠が残るものと、枠は抜き取られ、井戸底に用いた部材だけが残っているものがありました。井戸枠の構造には、①縦板を方形に組み四隅の柱と横桟で留めるもの、②横板を方形に積み上げるもの、③石を円形に積み上げるもの、④瓦を円筒状に積み上げるもの、⑤縦板を連結して、円筒状にするものなど、多様なものがありました。また、井戸底の水溜には、板を方形に組み、枡状としたもの、桶、曲物、甕などが使われていました。

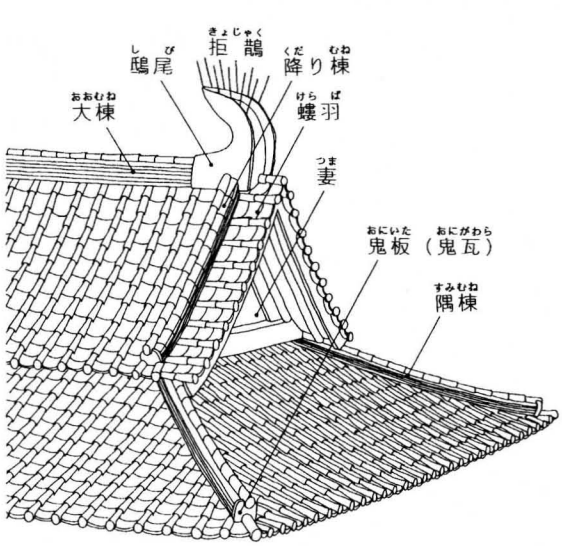
さらに、土坑11基のうちの数基には、平面形や深さ、埋土の堆積状況を考えると、枠が完全に抜き取られた井戸と考えられるものがあることから、発掘区内に造られていた井戸の数がさらに増加する可能性があります。

これらの状況から、一帯は西大寺の寺地として、長期にわたり利用されていた様子を窺うことができます。

今回、発見した鴟尾は、瓦製で、発掘区東半で発見した平安時代初めの井戸枠内と室町時代の土坑から、計2点が出土しました。



調査地位置図（1/10,000）



屋根の部分名称（『日本の美術第392号　鴟尾』から引用）

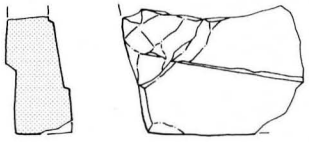
鴟尾とは　鴟尾は、屋根の大棟の両端を飾る瓦の一種です。飛鳥時代に中国から日本に伝えられ、宮殿や寺院の主要な建物に飾られたと考えられています。瓦製のほか、石・銅・鉛・木製の鴟尾があったようです。古代の鴟尾は、飛鳥寺、四天王寺、山田寺などの出土品や唐招提寺の伝世品が有名です。特に唐招提寺金堂の屋根を飾っていた瓦製鴟尾は、現存する唯一の奈良時代のものです。

文献中の鴟尾　平城京内の寺院に飾られた鴟尾については、文献にもその存在が記されています。奈良時代の『西大寺資財流記帳』、『正倉院文書』には、西大寺薬師金堂や法華寺阿弥陀浄土院金堂で、金銅製鴟尾が使われていたとする記録があります。また、平安時代の史料や絵画からも鴟尾の存在が窺えます。奈良・平安時代の宮殿や寺院の主要な建物には、金銅製を最上級とする鴟尾がのせられていたようです。

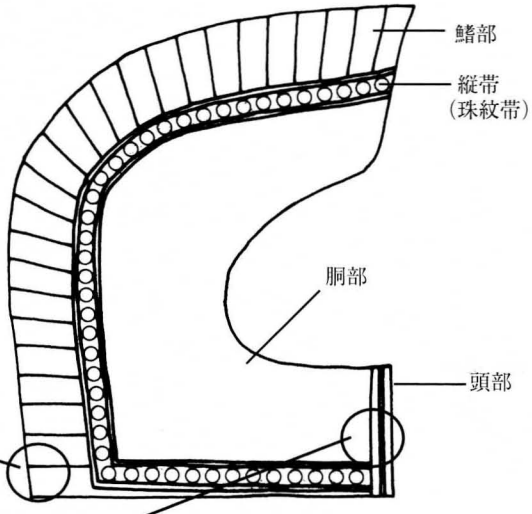
出土した鴟尾　鴟尾は、頭部、胴部、縦帯、鰭部に区分されています。今回、出土した鴟尾は、頭部と鰭部の断片です。頭部は、下部に横方向の突帯1本が、端部に縦方向の突帯2本があります。鰭部は、表裏面ともに段が確認できます。

鴟尾の復元　ところで、西大寺の所蔵品の中に、瓦製鴟尾の頭部があります。形状や大きさ、頭部に特徴的な突帯2本があるなど、今回出土したものとの共通点があります。今回の出土品と西大寺の所蔵品をもとに、鴟尾を復元してみると、鰭部や珠紋帯の表現などが、唐招提寺金堂の瓦製鴟尾によく似ていることがわかります。おおよそ、下図のように復元できるのではないかと考えており、非常に立派な鴟尾であったと想像できます。

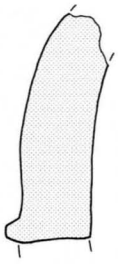
先述の通り、西大寺では、薬師金堂に金銅製鴟尾が飾られていたとはされていますが、瓦製鴟尾の記録はみられません。今回出土した瓦製鴟尾が、西大寺のどの建物に使われていたのか、興味の尽きないところです。今後、調査をすすめていきたいと考えています。

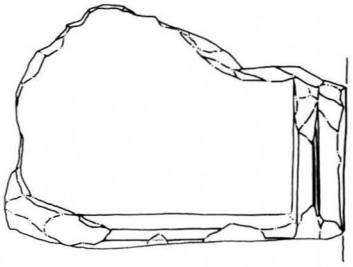


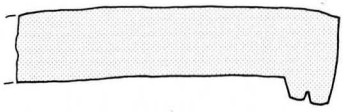
出土鴟尾鰭部図（1/8）



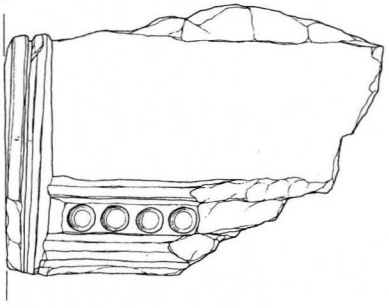
鴟尾復元模式側面図

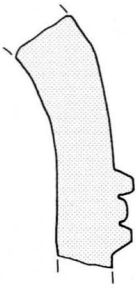


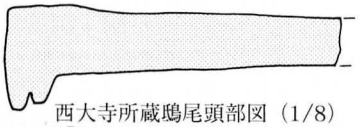




出土鴟尾頭部図（1/8）







西大寺所蔵鴟尾頭部図（1/8）
（『西大寺防災施設工事発掘調査報告書』掲載図を一部改変）

発行　奈良市教育委員会　平成18年3月6日